

2023年2月5日 主日礼拝

説教題「隠されている命」 コロサイの信徒への手紙 1章 13～14 節、3章 3 節

主任牧師 加藤 誠

「あなたがたは死んだのであって、あなたがたの命はキリストと共に神に内に隠されているのです」(コロサイ3章3節)

先日、小松延寿さんの告別式をこの礼拝堂で行わせていただきました。コロナになって以来、久しぶりに「教会の葬儀」となり、改めて「共同体で葬儀をすることの大切さ」を考えさせられました。コロナ以降、一般化しつつある「家族葬」にはそれなりの良さがあります。会葬者の対応に追われることなく静かに愛する家族の死を悼むことに集中できるのは、「グリーンワーク」（愛する家族を失う悲しみや痛みへのケア）の点でも大切なことです。一方で、品川合同葬祭の猪飼さんの「家族葬になって死が個別化し、共同体として大切なものを受け継ぐ場が失われてしまった」という言葉に考えさせられます。人が皆必ず経験する「死」が日常から切り離されて、若い世代を含めて「死」を身近に感じたり考えたりする場面がほんとうに少なくなっている時代に、教会という共同体において一人ひとりが「死」と「命」を見つめ自分を考える機会を与えられるのはとても貴重な場ではないでしょうか。

今、大井教会の聖書日課は「申命記」から「ヨシュア記」に入りました。荒れ野の旅を 40 年間導いてきたモーセが死んで、ヨシュアに引き継がれていくのです。モーセを含めてエジプトを脱出した世代の人びとがみんな荒れ野で「死ななければならなかった」意味を考えさせられています。わたしはヨシュアたち新しい世代が約束の地で、自分たちの新しい信仰の歩みを始めていくにあたり、モーセたち荒れ野世代の死をしっかりと見届けることを神さまから求められているように感じています。「死」は若い世代にとってはピンとこないものですが、人間は必ず「死」と向かい合わなければならない。その「死」をしっかりと見つめる時、自分の信仰を見つめ、自分が生きる意味を考えるよう促されていく。「死」は人を哲学的にさせ宗教的にさせる、非常に教育的な出来事です。「共同体」は、一人の死を囲みながら、各人が自分の死を見つめ命を見つめる大切な機会をいただくのです。そういう意味で、一人の信仰の友の死をみんなで囲んで悼み、その人が生きた意味とキリストの十字架の救いの意味を思い巡らし、感謝を心に刻み、自分の命の意味を見つめる機会をいただいていく「共同体としての葬儀」の大切さを考えていきたいと思います。

さて、小松延寿さんは 45 歳の時にイエス・キリストの信仰をいただいて以来、最期までキリストと共に歩まれました。その信仰は愛息の邦生さんを 5 歳で亡くした悲しみから始まります。小松さんが決めておられた葬儀の聖書（詩編 115 編）と賛美歌『わが君イエスよ 罪の身は』は、邦生さんの死からちょうど一年後に小

松さん自身がバプテスマを受けた時の聖書と賛美歌であり、小松さんのイエス・キリストへの熱い想いと信仰の決断がストレートに伝わってきて心にしみました。

また今朝ご一緒に開いた読んだコロサイ 1 章 13～14 節と 3 章 3 節は、緩和ケア病棟に移られた時に小松さんをお見舞いした時に一緒に読んだものですが、ここで「あなたがたの命は神の内に隠されている」という言葉に考えさせられます。「命が隠されている」とはどういう意味なのでしょう。

わたしはこう受け止めまっています。「わたしが生きる命の意味は、神の内に隠されている」と。わたしは日々少しでも意味ある一日を過ごしたいと思うのですが、その時に人々から自分に向けられる言葉、評価に一喜一憂するところがあります。良く言われれば気持ちがあがり、悪く言われればズドンと落ち込む。しかし人の評価というものは表面的、部分的にすぎません。過大評価もあれば、悪意ある誤解もあります。所詮、人の評価・言葉は限界があり、人の評価を求めて依り頼むと足をすくわれるのです。もしわたしがほんとうに自分の一日を少しでも意味あるもの、自分の生き方を少しでも意味あるものにしたいと思うなら、わたしが心を向けるべきは神さまの言葉であるはずです。私たちを真に愛して、心配し、寄り添い、私たち一人ひとりの最善を考えてくださっている真実の神の言葉に聴くことなしに、私たちは自分の命を意味あるものにはできないのです。

その意味で「あなたがたは死んだのだ！」という言葉が念押しのように添えられていることに心が留まります。この言葉は「キリストと共に死に、キリストと共に復活の命に生かされる」クリスチャンの命を指しています。キリストは、人びとの言葉・評価によって十字架につけられました。人間は根っから神の前に罪人なのです。そのような人間の言葉・評価に振り回されることなく「死んで」、私たちを復活の命に生かされる神の言葉にこそしっかり聴こう！…というのです。

その神さまは今日の自分を見たら何と言われるだろうか。「お前が立っているところ、見ているものは違うよ。それは的外れだ。しっかりしなさい」と注意され叱られるのか。それとも「君が大切にしようとしていることは大切なことだ。頑張れ」と励ましてくださるのか。そのようにして、自分が生きるべき羅針盤、方向性を、神さまの前に確認しながら、問いかけながら歩むとき、私たちの命は神さまによって意味あるものとされていく。そういう意味で、「わたしたちの命はキリストと共に神の内に隠されている」。だから人の言葉・評価に一喜一憂するのではなく、イエス・キリストを通して神さまにつながれて、一日一日、神さまの言葉に聴いていきなさいという招きの言葉として、このコロサイの言葉を受け止めたいのです。

この「神に内に隠れている命」に小松さんは最期まで生かされました。私たちもまたキリストにつながられ、教会につながられ、祈り、賛美、精一杯の奉仕をささげ、この不思議な命を共に受けていきたいのです。